

中世日本語のテンス・アスペクト研究 に関する考察

李 忠 均

0. はじめに

中世は日本語の歴史の中でも、様々な変化が最も顕著に現れた時代であると言われている。そのなかでテンス・アスペクトの意味を表す形式も例外なく、古代日本語とは全く異なる様子を見せている。例えば、古代日本語ではテンス・アスペクトの意味形式であった「キ・ケリ・ツ・ヌ・タリ・リ」のうち、ツ・タリを除いて徐々に衰えるようになる[注1]。特にタリは、タに変わり、段々過去を表わす意味へそのテンス・アスペクト的意味が変化している。そのため、テアル・テイル[注2]がそれまでタリが担っていたテンス・アスペクト的な意味表現の形式として使われるようになる。

中世日本語のテンス・アスペクトに関する研究は、テンス・アスペクト形式の通時的な研究を通して中世日本語のテンス・アスペクト形式が持つ意味の特徴などを探る研究と、存在詞イルの意味確立からテイルの文法化 (grammaticalization) [注3]の度合いに注目する研究で、大きく二つに分けることができる。これらは、共通的にテイルとテアルのアスペクト的意味の競合、補助動詞地位の獲得時期、テイルの有精性制約の消滅時期が問題になっている。

次節からは、テンス・アスペクト研究の流れを概観してから、先行研究を特に各研究のテンス・アスペクトの枠組みを定めた上、共通点と相違点等を中心に調べてみる。このような作業を通して、今までの研究成果を踏まえた上で、今後求められる研究のあり方についてまで考えて見ることにする。

1. テンス・アスペクト研究の流れ

中世日本語のテンス・アスペクト形式、特にテイル・テアルの形式を早い時期から取り扱った研究としては、湯澤 (1929)が挙げられる。湯澤は、室町時代のテイルとテアルの関係は、現代日本語とはかなり異なっていると指摘する。その相違点としては、現代日本語にテイルが用いられる場合にテアルを使う例が多く、一方、テイルは主語が

友情物である場合に限定され、テアルは自動詞に下接することが自由であることを挙げている。

柳田(1991)は、上代から現代までの進行態・已然態(テンス・アスペクト)表現をになう形式の変遷について研究をしており、テンス・アスペクト形式の変化を比較してみることができる数少ない考察の一つである。本稿では、柳田の室町時代中期・室町時代末期の研究に絞り、2節でその時代のテンス・アスペクトの形式の枠組みについて調べることにする。柳田のような通時的なテンス・アスペクト研究の中で、中世日本語を研究しているのは、山口(2003)も忽せにできない。山口は、古代日本語のタリの担っていたアスペクト形式が中世のテアル・テイルに引き継がれる過程について次のように述べている。

中世には、まず丁寧語による補助動詞「て侍り>て侍る」「て候ふ」「てござある」などが、これらの「たり」に担当するアスペクトの表示に用いられるようになり、それに先導されるように、室町期口語では、補助動詞「あり>ある」「ゐる」による「てあり>てある」や「てゐる」も用いられるようになった。

このような歴史的な変遷を探る研究とは少し異なって、中世日本語のテアル・テイルが表すテンス・アスペクトの意味に一層注目する研究としては、山下(1996)をはじめ、金水(2006 a)、福嶋(2002)(2004)(2011 b)、神永(2009)などを取り上げることができる。山下は、テアル・テイルのなか、存在詞の意味を持つ用法と補助動詞として用いられる用法を区別し調べている。山下によると、補助動詞として認め得るのは、テイルに非情物の主語が用いられた場合、連体用法でテアル・テイルに下接する名詞に、上接動詞の目的格相当のものが見られるようになる場合、連体用法でテアル・テイルに下接する名詞が時を表す名詞などに大きく偏る現象が見られなくなる場合であると説明する。ただ、坪井(1976)が述べたように、近世までテイルには有情物が主語である用例が殆どである。なお、他の判断基準も資料によりかなり差を現れているから、一概に考えるのは難しいが、補助動詞化の課程については評価に値するため本文を引用する。

テイル・テアルのイル・アルを補助動詞化せしむる力が、独立した動詞であらしめんとした力を上回った時、補助動詞化は一気に完成へと進んでいった事だろう。補助動詞化が進んでいけば、いずれは下接名詞の制限ばかりではなく、主格名詞の性情の区別も失われなければならない。その時、テイルは今までできなかった新しい表現を手に入れる。主格名詞が非情物の場合である。それに対してテアルは主格名詞という点では全く従来と変わらない。とすれば新鮮な表現を手

入れたテイルが変わりばえのしないテアルの領域を侵食していく事は容易に想像できる。…

金水は、存在詞及びテンス・アスペクトに関する論文を所収した『日本語存在表現の歴史』(2006a)で、存在詞の文法化に注目した観点から論を進めている。まず、『今昔物語集』の例をみると、未だ「ある(あたり)」「ある」が存在動詞の性質を強く持っており、文法化が十分進んでいない状況であるが、15～16世紀の抄物資料をみると、テアルの文法化が一段と進んでいる様子が見て取れると説明する。その反面、「いる」の存在動詞化が十分には進んでいないため、当然ながらテアルの主語は有情・無情を問わないという。またテアルの意味には、結果状態、運動の進行、パーフェクト[注4]ないし過去の意味が見て取れると述べている。『大蔵虎明本狂言集』においては、有情物主語の結果相(結果存続)、弱進行相[注5]を表す際にはテイルが用いられ、テアルは有情物主語が多く、パーフェクト相と見られる例が多いと述べている。

福嶋(2002)は、中世日本語のタが過去の意味だけではなく、現在の状態を表していると捉えられる例を基に、終止法で状態を表すタ・テアル・テイルについて考察している。その際、野村(1994)の存在様態の概念を取り入れているが、存在様態の判断基準は、「立っている」のように姿勢に関わる状態である場合、同様に「来ている」のように位置変化後の状態を表す場合、主体の存在場所を表す二格と共起している場合である。その結果、タには存在様態を表している例が少なく、テイル・テアルには制約(主体の有情・非情)があったため、タがそれ以前のタリに引き続き、当時のテイル・テアルの表しにくい状態(主に存在様態から遠い状態)を表していたと考えられると述べている。福嶋は「中世末期日本語の～テイル・～テアルと動詞基本形」(2004)では、それまでの研究で進行態を表している例が現代日本語の進行態のような具体的な動きを伴う例はほとんど見られず、無標の動詞基本形が具体的な動きを伴う進行態の解釈と期待される場面で用いられ、テアル・テイルの表しにくい部分を補っていると述べている。因みに、福嶋(2006)は、動詞基本形が現在の状態を表すのは、現代韓国語と類似しているとも主張する。

神永(2009)は、狂言集の虎明本[注6]のテアル用法を、構文の主語・目的語にあたるもの(有生・無生性)、文末テアルの文法化(存在動詞「ある」との関係)、テアルの上接動詞(テアル構文がもつ「変化の結果状態の表現」という特質から、自・他、変化性・非変化性の意味特徴)により分析する。このようなテアル用法の分析結果を基に、テイル・タとどのように競合しているのか考察している。まず、自動詞の分類を移動動詞(来る、出づ、参る)、主体変化動詞(咲く、たぎる、落ちる)、動作動詞(通る、わらふ)、状態動詞(似る)に分けている。移動動詞の例文は動作パーフェクト(経験・完成)を表し、主体変化動詞は主体の変化の結果状態、動作動詞は動作の進行、状

態動詞は単純な状態を表しているという。その反面、結果状態（結果存続）と単純な状態のテアルはまだ文法化されていない。一方、他動詞は大きく対象変化動詞と対象無変化動詞に分け、対象変化動詞を配置動詞（打つ、取り散らす）、作成動詞（書く、こしらへる）、質的・形状的变化動詞（殺す、しとめる）に分類する。その中、配置動詞・作成動詞の例は行為対象の変化の結果状態を、質的・形状的变化動詞は動作パーフェクトを表しているという。対象無変化動詞は、知覚動詞（聞く、見る）、発話動詞（云ふ、申す）、認識動詞（案ずる、推量する）、持続動詞（持つ、待つ）に分類し、知覚動詞・発話動詞・認識動詞は動作パーフェクトを、持続動詞は維持状態を表すという。このような虎明本の分析の結果を虎寛本[注7]と比較すると、テアルの動作パーフェクトの用法は、タに代わり、主語と目的語が無情物で、主体・対象変化動詞の結果存続の用法は、そのままテアルで表すようになる。また、主語が有情物であり、主体変化動詞の結果存続を表す用法や、持続動詞の維持状態を表す用法は、テイル構文に取って代わられると論じる。

2. 各研究におけるテンス・アスペクトの枠組み

この節では、先行研究の中、柳田、福嶋、金水のテンス・アスペクトの枠組みを素描した後、各研究の共通点や相違点を検討することにする。まず、柳田(1991)は、虎明本のテイルの主格名詞は有情物に限定されるが、テアルの主格名詞は有情物・非情物のどちらでもよいと述べている。なお、当時のテイル・テアルは既然態（結果存続）を表していただけではなく、進行態（動作の進行）も表していたという。その様子は表1>のようである。

	有情物	無情物
動作の進行	テイル	テアル
結果存続	テイル	テアル

<表1：柳田>

これに比べ、福嶋や金水の中世日本語におけるテンス・アスペクトを表す形式を表としてまとめると次のようである。

	有情物	無情物
動作の進行	動詞基本形	
結果存続	テイル	テアル

<表2：福嶋>

	有情物	無情物
動作の進行	テイル(弱進行相)	テアル
結果存続	テイル	テアル
パーフェクト・過去	テアル	

<表 3 : 金水>

因みに、次の<表 4 >は福嶋(2011 a)の現代日本語と中世末期日本語の時間表現の体系をまとめたものである。

	未来(以後)	現在(同時)	過去(以前)
現代日本語	スル	テイル	タ
中世末期日本語	ウ、ウズ(ル)、スル	スル、テイル、タ	タ

<表 4 >

上記の表のように3人共、テイル・テアルが持つテンス・アスペクトの意味を究明する際、主体の有情・無情のことを注目するのは共通的な事項であるが、動作の進行を表す項目においては、異なる部分が見出される。柳田と金水は、動作の進行をテイル・テアルが表しているということについては同様であるが、金水はテイルが表す動作の進行をテアルが表す意味と区別し、「弱進行相」という用語を設けるところに若干差があると言えよう。一方、福嶋のほうは動作の進行の意味は動詞基本形であるルが担っているという相違点を見せている。繰り返すと、柳田は中古のテイル(テオル)の進行態(動作の進行)の意味の存在を認めているが、金水は中世日本語のテイルは弱進行相を表し、福嶋ではテアル・テイルの動作の進行の意味を認めないなど、進行態は近世になってから現れるようになると述べている。

- (1) 此間久ク雨フリテアルカ今吹断——スツト吹晴テ有ソ (四海入海)
- (2) 茶の湯にすいたれは、おくのまにしかけておいたが、いかにもりんりんりと、たぎつてある (虎明本・鱸庖丁)

柳田が挙げている例(1)、(2)は本当に動作の進行の意味を表していると認め得る例ではあるが、非常に稀な例であることから金水と福嶋のような指摘があったかも知れない。例えば、例(2)を福嶋(2004)では、「湯が沸き立っている」というような解釈をし、変化後の状態(結果存続)を表している例として考えている。

このような意味解釈の相違点については、次の(3)と(4)を確認するともっと明確にな

る。

(3) つれほしうて是にまつてゐる、 (虎明本・昆布売)

(4) しそこなはふと思ふて、色々あんじて有に、 (虎明本・不悪)

例(3)、(4)は、先行研究(湯澤1929、坪井1976、柳田1991、金水2006 a)では、動作の進行を表していると考えられた例であるが、福嶋(2004)は、現代日本語のような具体的な動きを伴う動作の進行の例として認めることは難しいと指摘している。また、神永の説を適用すると、例(3)は維持状態、例(4)は動作パーフェクトの意味を表す例として解釈される。

このような動作の進行の意味をめぐる見解の差は、例(3)と(4)を見るかぎりでは、他の研究と比べ、一見福嶋と神永の解釈が似ているというように思われるかも知れないが、次の例をみると必ずしもそうでもないということが分かる。

(5) 筑紫のご百羅漢へ参る時、はりまのいなみ野をとをつてあれは、おほきな牛がふせつておつて、 (虎明本・法定)

例(5)は、神永によれば、動作動詞であるため、動作の進行を表す例に該当するが、福嶋によれば、このような例は条件表現であり、テアルの条件表現の中には、状態(動作の進行・結果存続)を表しているとは解釈できないものがあり、この例も前後の文脈から判断に迷うという用例であると説明する。つまり、福嶋は中古日本語で鈴木(1992)が指摘している通り、当時の動作の進行の意味(動きのある進行態の解釈が期待される場面)は無標の形式である動詞基本形が担当しており(例(6)(7))、テアル・テイルは文体的特徴[注8]や存在動詞の意味が強く残っているなどの制約があった(例(8))過渡期的段階にあるという。

(6) されはこそ竹の子をおるよな、 (虎明本・竹の子)

(7) 雨は降るか、降らぬかと問ふ時、田夫のむすこ見ていふ、 (醒睡笑・巻五)

(8) [食べた物の名前を忘れてしまった太郎冠者に、大名が質問している]朝くらて有か (虎明本・文蔵)

このような福嶋論については、『平家物語』と『天草版平家物語』とを比較した用例も参考になると思われる。

(9) 資成急いで馳せ帰つて清盛にこの由を申したれば、「さればこそ行綱は眞実を

いうた。この事を行綱が知らせずは清盛安穩にあらうか。」というて、やがて「謀叛の輩を搦め捕れ。」と下知せられたれば、二三百騎ほどづゝ、あそこゝに押寄せ押寄せ搦め捕つてござる。(天草版平家物語・23-21)

→資成いそぎ馳歸て、入道相國に此由申せば、「さればこそ。行綱はまことをいひけり。この事行綱しらせずは、淨海安穩に有べしや」とて、飛驒守景家・筑後守貞能に仰て、謀反の輩からめとるべき由下知せらる。仍二百余き、三百余騎、あそこゝにをしよせをしよせからめとる。(平家物語・大系 153)

例(9)は、成親の平氏打倒の計画に不安を抱いた多田蔵人行綱が、清盛に密告したため、成親・西光らが捕えられる場面であり、原拠本では動詞基本形の「からめとる」が用いられているのに対し、天草版ではテゴざる形の「搦め捕つてござる」が用いられている。これは、福嶋の言う動詞基本形が動きのある動作の進行の意味を表している例として挙げられるし、天草版でアスペクト形式のテゴザルが用いられていることもその証左であると思われるが、必ずしもこのような解釈が期待されない例もあるため、示しておく。

(10) 仁科・高梨などといふものも七千余騎で南の黒坂へ向ふに、我身は大手から一万余騎で向ふが、又一万余騎をあそこ、こゝに引隠いて置いて、兼平といふ者は六千余騎で日宮林に陣を取られてござつた。(天草版平家物語・164-21)

→仁科、高梨、山田の次郎、七千余騎にて、南黒坂へ向かふ。わが身は大手より一万余騎。また一万余騎をば、松坂の柳原に引き隠し、今井の二郎兼平六千余騎にて鶯の島をうち渡り、日宮林に陣をとる。(平家物語・百二十句本 62 句)

例(10)は、動きのある動作の進行の意味より結果存続の意味として捉える方が妥当であろう。

3. 福嶋(2011b)について

この節では、『日本語文法の歴史と変化』青木博史(編)の6節「～テイルの成立とその発達」に論じられている福嶋氏の内容紹介と共に韓国語関連の事項を検証していくことにする。

福嶋(2011b)は、野田(2010)の研究に反駁する内容が主である。野田は『今昔物語集』から用例を採集し、この時期からアスペクト形式としてテイルの成立が見られると述べている。これは、テイルの成立が従来の概ね15世紀以降の成立説に比べ、300余年早かったということである。野田は、テアル・テイルの用法分類に主格維持

性という概念を用い、動作の進行のとは言えない存在様態用法という用法を設け、その成立時期を裏付けている。ところが、テイルの用例については、福嶋の指摘通り、存在詞イルからのアスペクト形式のテイルではなく、多くがタリが付いた「～てゐたり」の例であり、これについて、山下(1989)、山下(1990)、金水(1999)は、基本的に未だ文文化が進んでいない存在文(ないし存在の意志的維持を表す文)と考えている。つまり、野田は、存在様態用法を設けたことについては評価できるが、その用例がアスペクト形式のテイルの例ではなく、存在詞の「～てゐたり」の例であるという致命的な問題点を抱えている。

引き続き、福嶋は中世日本語のテイル研究に類似している現代韓国語との対照を通して、テイルのアスペクト的意味やルの時間的意味まで述べている。中世日本語と同じく、現代韓国語でも過去を表す形式で、現状の状態(単純状態)を表し、例(11)、(12)のように、動詞基本形であるルに該当する形で動詞の進行の意味を表すことができるということである。

(11) 「少女たちのレイプが組織ぐるみで行われていることについては、確かな裏をとってあります」(1Q84、村上春樹)

“소녀들에 대한 성폭행이 조직적으로 이루어진다는 확실한 증거를 갖고 있어요.”(1Q84、양윤옥Yang Yoon-Ok)

(12) この世界は自分が中心になって動いていると思っている。自分がいなければ地球はうまく動かないだろうと考えている。(1Q84、村上春樹)

세상은 자신을 중심으로 돌아간다고 생각한다. 자기가 없으면 지구가 제대로 돌아가지 않을 거라고 생각한다. (1Q84、양윤옥Yang Yoon-Ok)

拙稿(2010)でみたように、現代日本語のテイルが、動作の進行を表す場合は、韓国語の「-고 있다(-ko issta)[注9]」に、結果存続の意味を表す場合は、「-고 있다(-ko issta)」と「-어 있다(-e issta)」に対応すると言われている(梅田1991、浜之上1992)。しかしながら、韓国語の場合、状態動詞(形容詞)は「基本形(-Φ-)」が、その他の動詞は「基本形+~다(-nu-ta) / ~는다(-nun-ta)」がよく用いられ、日本語のテイルに対応することは周知のことである。

ところが、福嶋のように、韓国語において動詞基本形に先語末語尾(prefinal ending)[注10]と言われる-nu-ta(ㄴ다)が付いた形を中世日本語のル形と同様に扱うのは、やや無理があると思われる。なぜなら、動作の進行の意味を表すことができる-nu-taが付いた形全体を動詞基本形とみなすのは(実際、例(11)の基本形は「이루어지다」、例(12)の基本形は「돌아가다」「생각하다」である。)、動詞の活用には取られてしまう-nu-taが含まれているからである。言い換えれば、-nu-taはテイルのような役割を果たしてい

るため、日本語でテイルが付いた形を動詞基本形と呼ぶことと同様になる。例えば、動詞基本形（辞書形）の「먹다（食べる）」は、普段-nu-ta が付いた「먹는다（食べている）」の形で用いられるため、福嶋論のように動詞基本形とみなすことも可能であると思われるが、そうなると-nu-ta と同じく先語末語尾が付いた形式である、過去形の「먹었다（食べた）」、連体形の「먹는（食べる [食べている] ~）」、中世日本語のウ・ウズと似ている意味を持つ形である「먹히려다（食べようと思っている）」も動詞基本形として認めざるを得ない。

このような点からみると、現代韓国語と類似しているという論拠で、中世日本語においてルが動作の進行の意味を表していたと判断することは無理が生じると考えられる。むしろ動詞基本形は、特定の文法形式を担当していなかったというように想定するのが妥当であろう。

4. おわりに

今まで見たように、中世日本語において、金水はテイルが弱進行形の意味を表し、福嶋はテアル・テイルとも現代日本語のような全ての運動動詞の進行態を表す例はほとんどないと論じている。実際、現代日本語のように、動作の進行の意味を比較的強く表している例は稀であった。このような指摘がある以上、従来テアル・テイルが動作進行の意味を帯びていると言われた例をどのように処理するかが課題になる。

ところが、福嶋(2004)は、テアル・テイル例のなか、発話に関係する例を含め、その他の例を強引に動作の進行の意味から外しているような気がする。それは、動詞基本形であるルが動作の進行の意味を表しているという主張を展開するためであると思われる。むしろ、古代日本語から中世日本語における動作の進行の意味というのは、現代日本語とは表現方式が異なるため、アスペクト的にニュートラルな意味を持つルが動作の進行の意味を表している形式のように見られるだけかも知れない。ルの無色な性質を議論した研究としては、尾上(2001)、井島(2011)などを挙げられるし、福嶋の<表4>のなかのルが現在の意味も未来の意味も表しているということからその様態が窺える。そして、中世日本語と現代日本語と表現方式が異なる点は、現代韓国語で動作の進行の意味を形式として、-ko issta（動作の進行の意味が強）と-nu-ta（動作の進行の意味が弱）が共存していることと似ているだろう。

また、拙稿(2008)で中世日本語のテアルという形式は、本来古代日本語のテアリがそのまま用いられているものであり、用例も身分が高い人物の発話場面が多いなど古風な言い方の用法との関連を主張した。それと関係がある内容を取り上げてみると、柳田(1991)は、虎明本のテアルについて、「主格が有精物である場合に用いられた「テアル」の例を見てみると、それらは、神仏や大名・目代・奏者などが荘重さをも

たせて語る会話に用いられることが多く、文語色を帯びて来ていたのではないかということである。」といい、このような文語色を帯びているということからテアルの使用が衰退する原因であると述べている。金水（2006 a）は、虎明本の中、荘重な口調で話す人物にテアルの使用が目立つ点は注目されると指摘し、それらは、意味的にタと置き換えることができ、テアルの一部の用法が古風な言い方になってきていることを表しているものと論じている。

このような事を踏まえた上、今後は古代日本語から現代日本語までのテアル・テイルの意味を探りながら、中世日本語と現代日本語の間のアスペクト表現の仕方の差について考察を進めて行きたいと思う。

[注]

- 1 柳田(1986)(1991)、山口(1997)などを参照。
- 2 本稿でのテイルは、中世の「～てみる」を含んだ代表的な形式として用いることにする。
- 3 「文法化 (grammaticalization)」は、内容語 (content word) から機能語 (function word) への変化のプロセスであり、存在詞の場合は、「今」「ここ」における対象の存在が強く含意されるほど原型的の意味に近く、「今」「ここ」が薄まるほど、文法化に進んでいるということになる。
- 4 パーフェクト (perfect) の定義はさまざまであるが、Comrie(1976)によると、つぎのとおりである。日本語訳は基本的に山田小枝(1988)の該当部分を引用した。

One way in which the perfect differs from the other aspects that we have examined is that it expresses a relation between two time-points, on the one hand the time of the state resulting from a prior situation, and on the other the time of that prior situation.

(いままでわれわれがしらべてきた、そのほかのアスペクトからパーフェクトがことになっていることのひとつとして、パーフェクトはふたつの時点のあいだの関係を表現している。つまり、一方には先行する場面から結果として生じてくる状態の時間があり、他方には先行する場面そのものの時間があって、パーフェクトはこれらのふたつの時点のあいだの関係を表現しているのである。)

The perfect is rather different from these aspects, since it tells us nothing directly about the situation in itself, but rather relates some state to a preceding situation.

(パーフェクトはこのアスペクトとはかなりことになっている。なぜなら、パーフェクトは場面そのものについては直接的にはなんらかたらないからである。むしろ、ある状態をそれに先行する場面と関係づけているのである。)

- 5 金水(1995)は、次のようなタリの用法を弱進行相の例と呼び、進行相ではなく、結果相の一部と見なしている。

明石の入道、行ひ務めたるさま、いみじう思ひすましたるを、 (源氏・明石)

- 6 『大蔵虎明本 狂言集の研究 上、中、下』(表現社 1972)
- 7 『大蔵虎寛本 能狂言 上、中、下』(岩波文庫 1942)

- 8 柳田(1991)の文語色、金水(2006a)、拙稿(2008)の古風な言い方に該当する。
- 9 韓国語のローマ字表記は、Martin et al (1967)の表記法(Yale式)を用いる。
- 10 先語末語尾とは、活用をする際、語幹から一番遠いところに現れる文法形態素を語末語尾(final ending)と言うのに対し、その出現位置が語末語尾より先行する位置に現れる文法形態素を先語末語尾(prefinal ending)と言う。

[参考文献]

- 安平鎬・福嶋健伸 2005「中世末期日本語と現代韓国語のテンス・アスペクト体系—存在型アスペクト形式の文法化の度合い—」『日本語の研究』1-3
- 井島正博 2011『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房
- 梅田博之 1991『スタンダードハングル講座2 文法・語彙』大修館書店
- 尾上圭介 2001『文法と意味1』くろしお出版
- 春日和男 1968『存在詞に関する研究』風間書房
- 神永正史 2009「虎明本のテアル構文」『筑波日本語研究』14
- 金水 敏 1982「人を主語とする存在表現—天草版平家物語を中心に—」『国語と国文学』59-12
- 金水 敏 1995「いわゆる「進行態」について」『国語学論集：築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院
- 金水 敏 1997「現在の存在を表す「いた」について—国語史資料と方言から—」『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房
- 金水 敏 1999「近代語の状態化形式の構造」『近代語研究 第十集』武蔵野書院
- 金水 敏 2006a『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
- 金水 敏 2006b「日本語アスペクトの歴史的な研究」『日本語文法』6-2 くろしお出版
- 鈴木 泰 1992『古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—』ひつじ書房
- 坪井美樹 1976「近世のテイルとテアル」『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』表現社
- 野田高広 2010『「今昔物語集」のアスペクト形式 V テイル・テアルについて』『日本語の研究』6-1
- 野村剛史 1994「上代語のリ・タリについて」『国語国文』63-1
- 浜之上幸 1992「現代朝鮮語の「結果相」=状態パーフェクト—動作パーフェクトとの対比を中心に—」『朝鮮学報』142
- 福嶋健伸 2000「中世末期日本語の—テイル・—テアルについて—動作継続を表している場合を中心に—」『筑波日本語研究』5
- 福嶋健伸 2001「中世末期日本語のウチ(ニ)節における—テイルと動詞基本形-状態化形式の文法化をめぐる—」『筑波日本語研究』6
- 福嶋健伸 2002「中世末期日本語の～タについて」『国語国文』71-8
- 福嶋健伸 2004「中世末期日本語の～テイル・～テアルと動詞基本形」『国語と国文学』81-2
- 福嶋健伸 2006「「狂言のことば」と現代韓国語の意外な類似点」『武蔵野文学』53

- 福嶋健伸 2011a 「中世末期日本語の～ウ・～ウズ（ル）と動詞基本形—～テイルを含めた体系的視点からの考察—」『国語国文』80-3
- 福嶋健伸 2011b 「～ているの成立とその発達」青木博史（編）『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版
- 柳田征司 1986 「近代語「テアル」」『愛媛国文と教育』19
- 柳田征司 1991 『室町時代語資料による基本動詞の研究』武蔵野書院
- 山口堯二 1997 「完了辞・過去辞の通時的統合—「た」への収斂—」『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房
- 山口堯二 2001 「完了表現史にかかわる補助動詞の推移」『京都語文』7
- 山口堯二 2003 『助動詞史を探る』和泉書院
- 山下和弘 1989 「「タリ」と「テアリ」」『語文研究』66-67
- 山下和弘 1990 「「て+いる」と「て+ある」の連体用法」『筑紫語学研究』1
- 山下和弘 1996 「中世以後のテイルとテアル」『国語国文』65-7
- 山下和弘 2006 「タリからテアルへ」『筑紫語学論叢Ⅱ』風間書房
- 山下和弘 2011 「中世の資料に見られる「テ侍リ」と「テ候フ」」『福岡女子短大紀要』75号
- 山田小枝 1988 『アスペクト』むぎ書房
- 湯澤幸吉郎 1929 『室町時代の言語研究』大岡山書店（再版『室町時代言語の研究』1955 風間書房）
- 李 忠均 2008 『『エソポのハプラス』における「シテ+存在詞」形式の意味』『日本語学論集』4
- 李 忠均 2009 『『天草版平家物語』における「シテ+存在詞」形式の意味』『国語と国文学』2009年11月号
- 李 忠均 2010 「日韓両言語のアスペクト形式の様相に関する研究—翻訳書を中心に—」『日本語学論集』6
- 李 忠均 2011 『『天草版平家物語』と『大蔵虎明本狂言集』における「シテゴザル」形式の意味』『日本語学論集』7

Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge : Cambridge University Press.

Martin, Samuel. E. et al. 1967 *A Korean-English Dictionary*. New Haven: Yale University Press

(イー チュンギョン 大学院人文社会系研究科 博士課程5年)